

Monto Kaj Nêgo
Monata Organo de Monta kaj Nega Clubo.

山と雪

第 六 號



札幌 山と雪の會 發行

昭和六年三月發行

瑞西山岳會の登山小屋（承前）

グスタフ・クルツク著
山崎春雄譯

〔一〕

北海道に於ける普通雪崩に就て（二）

宇都宮高

〔三〕

メムロ岳

坂本直行

〔七〕

第九回全北海道選手權大會の記録

宮下利三

〔三〕

雜錄

寫眞

▲後嶽岳（千島幌筵島）

倉田拓造

▲芽室岳

坂本直行

▲全日本選手權大會に於ける關口勇選手の飛躍

圖版

Gadlimohütte auf Booca di Gadhino, Tessin.

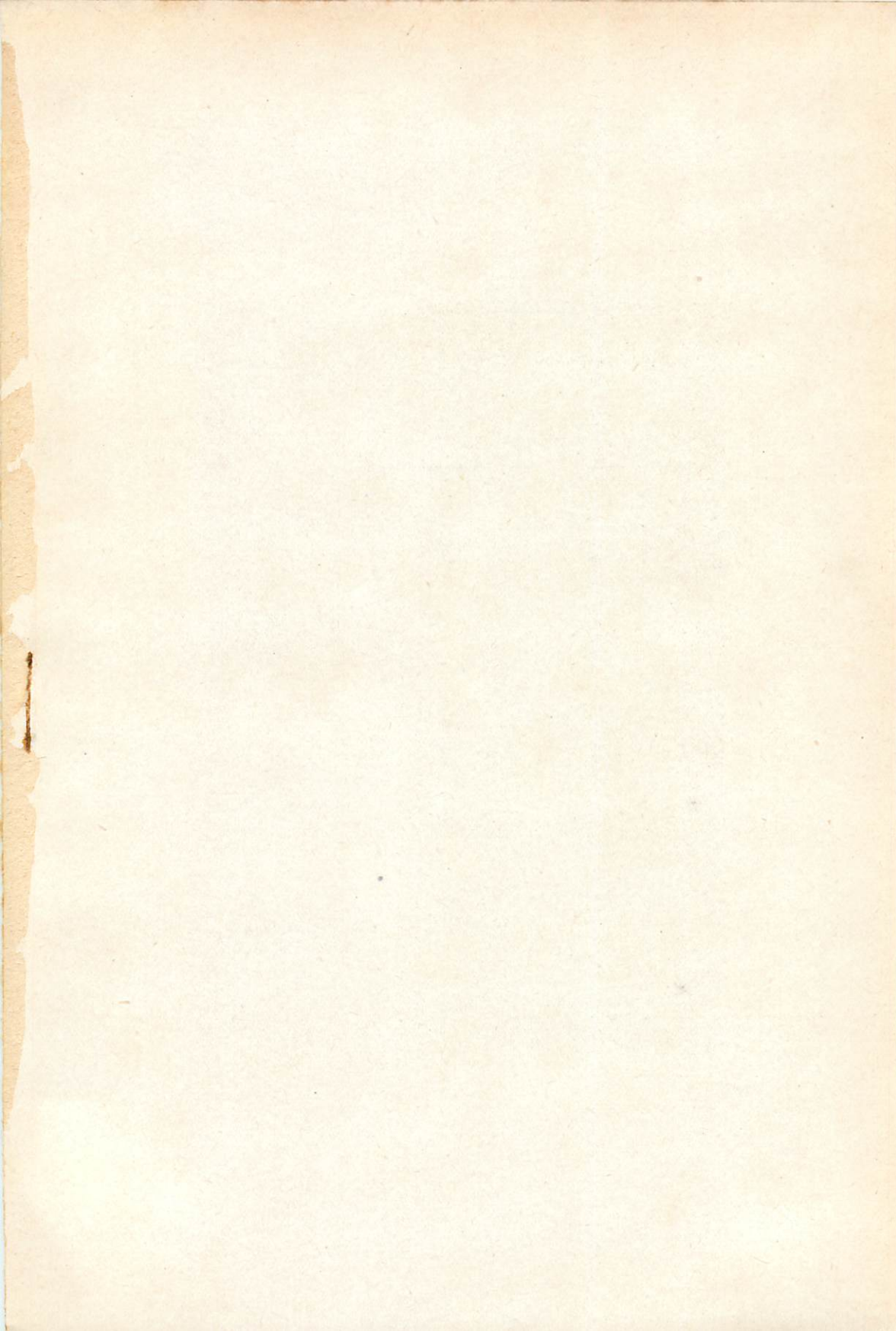
Skihaus der S. Uto

第六號 目次



後 嶽 岳 (千島幌筵島)

倉 田 拓 造



瑞西山岳會の登山小屋

(承前)

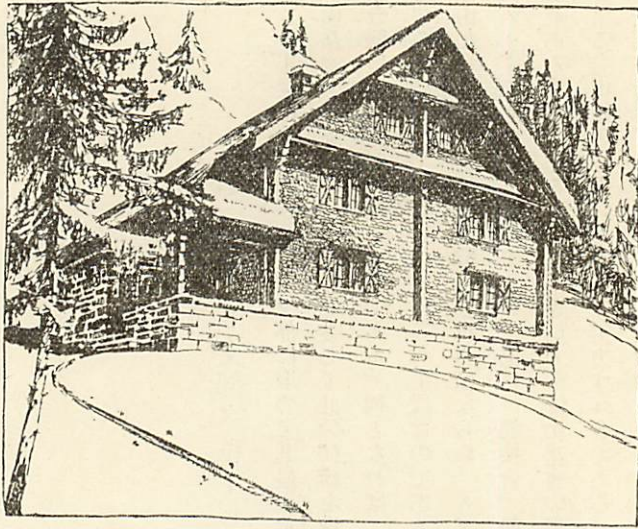
グスタフ・クルツク 著
山崎 春 雄 譯

一〇、ウト支部スキーヒユツテ計畫

スキー登山の奨励が、ウト支部に取つて其最も重要な任務なることは近年ますます明白に認めらるゝに至つたのである。山岳會の諸支部は、其全力を盡して此の任務を遂行すべきであつて、之を専門のスポーツ團體の手に委ねて顧みざるが如き態度は、甚だ誤れるものである。何となれば、冬期に於ても登高を志さず者の數は非常に多く、冬の山岳美を味はんとする者に向つて、スキーは唯一の手段なのである。山岳會がスキー術を其の事業の範圍中に抱括するとならば、此問題は山岳會獨自の立場より解決されねばならぬ。スポーツ團體にては、純スポーツ的の要素が主眼たるは當然であるが、山岳スキーに向つては不用のものである。競技會、競走、觀衆本位の諸種の催し等はスポーツとしてのスキー術には絶大の價值あるものであるが、これ等のものは山岳會の事業とは全く關係なきものである。山岳會の任務は其會員をしてスキーによる登山を可能ならしむるに努力すべきである。ウト支部も須らく、専らスキー講習會、特に山岳スキー講習會の開催スキー旅行の企て及びスキー宿泊所の設置に、其事業を局限すべきである。これだけで既に充分立派なる感謝さるべき事業である。

近來、此等の事業中既に相當の計畫が着々として實施せられつゝあるのである。一九二二年以來、七人の支部會員より

なるスキー委員會は熱心に其任務に努力しつゝあり、これにより一九一六年カッツエンストリツクのスキー小屋がまづ設置せられた。既設の建物を賃借せる第一のスキー宿泊所であるが、四年後に至り所有者の變更の爲め閉鎖された。一九一



九年秋、更にグラールスのエルメルベルグヒュツテを賃借し、快適なる設備が施された。一九二一年秋にはシユウイツのスタンワルドに一農家を借入れ、従前のカッツエンストリツクの設備をこゝに移轉した。尙支部は有名なるスキー家バルブラン及びビルゲリーを招聘して、スキー講習會を開きて多大の効果を擧げてゐる。目下支部のスキー委員は十三名に増加され、スキー宿泊所の借入、支部スキー小屋の建設及び其の爲めのスキー地の撰擇等に就き、調査の歩を進めて居る。

勿論、山岳會各支部の登山小屋は大部分スキー登山者の宿泊に使用することが出来る。カドリモヒュツテ及びアルベルトハイムヒュツテの如き、其附近は絶好のスキーゲレンデとして知られて居る。

此等の登山小屋は雪崩の危険なき限り、冬の到達も容易であつて小屋を根據とする幾多の素晴らしきスキー登山をなすことが出来るのである。たゞ此等の小屋は一般に其位置が高きに過ぎ、本来のスキー宿泊所として適當でないのである。チューリヒよりの道程も亦遠きに過ぐるものが多い。我々の欲する所のものは、チューリヒよりも容易に到達し得るスキー宿泊所であつて、其距離は早くも土曜正午にチューリヒを出發し、日曜夕刻までに歸着し得る程度でなければならぬ。従つて吾人に取て問題とな

り得るスキー地は、サンクトガレン、シユウイツ、グラールス、ウリのフォルアルペン山地に求めねばならない。本来の登山小屋は高山の開発に用ゐる爲に、出来るだけの高所に置かるべきであるが（普通二五〇〇米内外を以て其下の境界とする）スキー宿泊所の位置は、當然一二〇〇乃至一六〇〇米のフォルアルペンに置かるべきである。此所にスキー宿泊所設置の特殊の困難が存する。これら低山地のスキー地域に普通の意味の登山小屋を建設して、これを普通の如く經營することが出来ないのは當然である。何となれば、かくの如き地域は初夏より晩秋に至るまで容易に到達し得られ、ありとあらゆる有難からぬ都會人の集合所となる故である。

ウト支部も亦他の支部も、まづ最初の企てとしては此等スキー地方に於ては、既設の建物を借入れ、これを冬期スキー宿泊所として設備したのである。此の方法は將來も引續き採用されるべきもので、最も賢明なる手段と云ふべきである。然し乍ら支部專屬のスキーヒュッテも次第に其必要を認めらるゝに至り、ウト支部にても二年來其の實現に向つて努力しつゝあるのである。其最大の困難は、かくの如きスキー小屋を夏期に於て如何に處置すべきやの問題に存するのである。先づ考へらるゝは、之を素朴なる旅館として賃貸するか、或は學校生徒の夏期合宿所として使用せしむるかの二つである。然し乍らこの二つの場合には、スキー宿泊所としては本來必要ならざる、然も相當多大の費用を要する諸設備をも施さねばならないこととなる。然らば此の計畫は寧ろ夏期の使用を主体とし、冬の夫れは副たることに當然なつて來るのである。山岳會支部が、今更此上ホテルの數を増し、又は夏期學校の建設に貢獻する必要は毫もないのである。最も都合よき解決は結局、小屋を純スキー宿泊所として建設し、夏期はこれを閉鎖するにあるであらう。但し會員のある團體が夏秋の候、時に之を使用することは當然許さるべきであらう。

ヒュッテの建設地點に就ても既に大略スキー委員の實地踏査により決定に近づきつゝある。

茲に掲ぐる所のヒュッテ計畫は、將來其細個條に亘りてはハインリヒ・ブレイムにより完成さるゝ筈である。予は此の計畫に當り、其設計と構造とは其地方の慣習的建築に適應すべきことを原則としたのである。小屋の平面は暖爐を家の中

心に置く所の瑞西農家の夫れである。構造は森林内の建築として當然の型式なる丸木造りとし、母屋の基礎、炊事室の周囲は石灰石の石壁を採用した。

訪問者は小屋の南西側より屋根にて覆はれたる入口のテレースを経て、小屋に入る。玄關にはスキーの整理のためのスタンドの設備がある。玄關の後は便所で、階上よりは階段を下りて直ちに連絡する。小屋の後部は石造の壁にて圍まれ、防風扉により玄關と隔てらる。壁側には二階に通ずる階段あり。中央は廣き炊事室、突當りは薪置場として區劃さる。炊事場の流しは水道を設け、凍結を防ぐため不斷放水せしむることゝなつてゐる。炊事室中央は暖爐、兩側に二組の炊事ストーブを置き、更に其の横に居間の大暖爐の燃口あり、中央は開放して爐邊となり、宿泊者少數なる時は大暖爐を使用せざるも、この爐邊の裸火の周囲に愉快な團樂を樂むことが出来るであらう。小屋の前部は二部に分れたる廣き居間となり、各々六個の座席に圍まれたる六個の卓子を有す。二階は三十六人の寢床を有し、其内二十八人は二室に分たれ、八人分はカーテンにて仕切られ婦人専用である。三階（屋根裏）は二十四人分の寢床を有し、其内十四人分は更に二室に分たれてゐる。階下の薪置場の外、尙二階（テレースの屋根裏）にも薪置場あり、玄關より梯子にて昇降出来る。總計寢床六十人坐席四十四人を有す。

支部は既にスキーヒュッテ建設の費用の爲めに、會員の寄附金約一六五〇〇フランを得たれば、近き將來に於て其實現を見るに至るであらう。

此の小屋はウト支部のスキーハウスとなるものであるが、勿論他の支部の會員をも喜んで迎ふるであらう。

六、カドリモヒユツテ

Die Cadlino-Hütte

auf der Boocca di Cadlino, Tessin.

一九一五年、予が支部幹事會の希望に依り、小屋監督ヒュツテ監督の後を引受けた時に、カドリモ溪谷に新ヒュツテを建設することは既に決定されてあつたのである。小屋の設計も既に完成せられ、其位置も一九一四年の夏、幹事會の間に定められてあつた。

然し乍ら、予は其原設計を到底承認することは出来なかつた。小屋は丈高き木骨建として考案され、間取りも窮屈に、人数も漸く二十二人の寢床を容るゝに過ぎざる計畫にて、予の脳裡に形成られたる小屋建築の理想とは全く相容れざるものであつた。予の山行の度毎に將來小屋建築に關係する事あるべしとは考へたる事もなかりしも、登山小屋に就ては予は絶えず興味を以て之を注意してゐたのである。然して、予の得たる決論は木骨建は高山に於て全然不適當なること、石造の基礎の上に置かれたる木骨建の小屋は、高山の自然の内に於ける異物にして、石造に勝る建築法はかゝる山地に於ては考へ得られざること且つ附近に砂を得らるゝならば、如何なる場所にも容易に之を建つることを得る事である。又、予は石造の豫備條件として、既に一八九〇年ドームヒュツテの建築に於て應用されたる如く、石壁と間隙により隔てられたる内面の板張りが、是非共必要なことをも認めたのである。予は又世界大戦中ゴットハルド守備隊に勤務して、高山に於ける兵員の宿泊所に關して各種の經驗を積み、登山小屋建築に對する幾多の教示を得たのである。又、予の建築家としての職業上の經驗は、予をして建築設計及び其の細部を藝術的に完成することの價値と意義とに關して、確固たる信念を抱かしむるに至つた。又、予の信ずる所によれば、建築に眞の美を賦與するの能力は、天稟の才能と多くの經驗とを有する勝れたる建築家にして始めて之を具備するのである。かくの如き美を我等の登山小屋の素朴なる高山建築に於ても、之を確持することは、予に取て最初より一の義務と感ぜられたのである。

かくの如き根本的の意見を以て、予は新にカドリモヒュツテの設計を自ら起案した。最初の計畫より予は喜んで其の取るべき意圖、即ち二個の小屋單位を一建物に合併したる點をば踏襲した。多くの類似の考案の中より最後に茲に掲ぐるが

如き實行の設計が、次第に確定したのである。友人チユリーヒの建築家プイスター兄弟は、進んで計畫の細部に對して意

匠を凝したる藝術的の形を與へ、かくして完成されたる全体を作上ぐることを得たのである。

位置、到達路及び登攀

小屋は海拔二五七三米、カドリモ溪谷のカナリヤ溪谷に合流する附近、ボツカ・デイ・カドリモの上に建てらる。小屋の棟は正しく東西に置かれ、南面せる小屋の入口よりしてカムボテンチア山群及びバソヂノを一望の裡に收むることが出来る。

尙遠くはミツシャールベル及びワイスホルンの山影を、ベドレット溪谷の山々の彼方に望むことが出来る。

小屋への到路はアイロロ、サンタマリア及びアンデルマットよりする。アイロロー小屋四時間半、サンタマリア小屋間三時間。

小屋よりの登攀は良好なる展望頂なるタネグ及びブント・ネラが先づ算えらる。小屋よりの興味ある登頂としては尙、ピッツ・ボレル・ピッツ・ブラ其他の岩登り、ゴットハルド方面其他多くの峠越えがある。廣汎なるゴットハルド地域の一部、當然開發さるべくして未だ人に知られざる部分は、此のヒユッテの領域に屬するものである。小屋がゴットハルド守備隊に利用せらるゝことも吾等の喜びの一である。就中、吾人の最大の喜びはカドリモヒユ

ッテの建設により、吾人とゴットハルドの彼方なる伊太利語系の聯邦同志とを結合する因縁の、更に緊密となること之で



ある。實際、本ヒユツテの建設以來、東部及び中央瑞西の登山者にして足跡を北部テツシンの山岳に印するもの次第に多く、これにより親切にして自由を矜るテツシン山地の住民を識るの機會を得るは、誠に喜ぶべきことと云はねばならぬ。

敷地

ヒエツテはクイント村の管轄内にあり、敷地はウト支部に對し無償にて讓渡せられた。

設計及び構造

設計の根本は一階建てとし、入口、玄關、薪置場及び暖爐を共同とする二個の獨立せる小屋單位を合併したるものである。二個の單位は全く相稱的に置かれ、各々居間、炊事場及び寢室を有し、配置及び構造上最も單純なる形が與へられた。石積の暖爐は左右兩單位の中間に置かれ、全体の中心をなすのである。小屋の中央部は玄關、炊事場及び薪置場に充てられ、薪置場の上部に西側の小屋半部に屬する六人分の寢床が設けられてある。居間には八人の坐席を繞らす卓子二個づゝを置き、其後の二重寢床は七十センチ幅十六人分の席を有す。

下部寢床の北西隅二人分はカーテンにより婦人用として隔離さる。炊事ストーヴの上部も床張りとなり、救難具及び小屋番用の押入れが置かれる。

小屋の北東に急斜面の岩石を利用し石積の便所、小屋の北西隅には塵芥捨場が設けられた。

飲料水は小屋の東南方にある。

南側外壁に添て石積の腰掛、テレースに添て腰掛兼用の石垣を繞らす。設計圖にある西側切妻面の腰掛及び石卓は、一九二二年夏、築造せらるゝ筈である。

構造は左の仕様書に依る。壁の厚さ五十センチ、片麻岩の石積、セメントモルタル。外面目地塗り、内面軽く上塗りを施す、内部板張りとの間隔十センチ、板張りは厚さ二センチの板を用ゆること。目板、床に石板を敷く場所左の如し。テレース、玄關、炊事場及び薪置場。居間の床板及び寢床の下は三センチ厚さのタンネを用ふ。寢床は四センチ半とす。

屋 根 二センチ半の板張りの上に屋根紙を張り、防腐剤に浸漬したる唐檜カラヅキの柂葺とす。屋根の内面も全部板張り及び目板打ちをなすこと。暖爐は石積、戸、窓、雨戸、卓子及び椅子は落葉松、造作金物は鍛鐵製とす。入口扉は上下二翼に分れ外開きとすること。切妻側の窓及び雨戸は内外より戸締りをなし得ること（積雪多き時に小屋に入る爲）

ペンキ塗り 軒、垂木及び母屋材断面、入口扉、雨戸及び窓外面、朱色、雨戸は藍白の縞（チユーリヒの色章）

小屋名稱 瑞西、カントンチユーリヒ及びテツシンの紋章を花崗石に彫刻し着色すること。

設備は現時の單純なる要求に適應すること、炊事ストーブは鍛鐵製、燃口上下二口としリントールのフエグリ工場の製作に係る。等々

工 事 の 進 行

一九一六年冬、予は二十分の一縮圖及び原寸圖を基礎として石工、木工、屋根、指物、硝子、塗工及び運搬に分ち、競争入札を行ひ、其結果クラグリアのルツツ兄弟（一九一〇年メデルセルヒユツテの請負者）との間に建築契約を締結し、一五二五〇フランの總經費豫算を以て工事に着手するに至つた。木工はクラグリアに於て仕上げられ、工事監督者の檢閲を受け、受渡しをしたのである。材料全部（セメントを含む）の運搬はサンタ・マリア迄は馬車により、それより現場までは人夫を使用した。カドリモ谿谷の上までは、運搬の爲めに路付けをなさねばならなかつた。運搬は重に一九一六年七月中には行はれたる爲め、カドリモ谿谷はまだ雪に埋もれ、駄馬の使用が不可能であつたのである。砂は小屋の附近に得ることが出来た。

工事の施行は左の如くである。

工事契約の締結

三月四日

クラグリアに於ける木工

五月二十七日

材料の受渡し

運搬 クラグリアーサンタマリア

同 サンタマリアー現場

實 測

假小屋建設(職人の宿泊所)

岩石の爆破作業及び地均し

砂 準 備

石 積 開 始

屋根小屋の上棟

屋根葺葺完成

窓、戸及び内部仕上げ

便 所 築 造

壁 完 成

全部仕上り、引渡し準備

落 成、仕 拂

一九一六年十月七、八日多數の來會者參集、新ヒユツテのS・A・C 並びにツト支部への引渡しが行はれた。献堂式の儀はクイントの牧師ドーム・ガンナにより執行された。

小屋の費用

一九一六年、建設の爲に要したる費用は左の決算書の示す如くである。

一九一五年 準 備 費

一九一六年 敷地所有權登記

ルツツとの契約によるもの

二一七フラン

一二六

六月一—十五日

六月十三—八月十五日

七月十日

八月一—二日

七月二十五—三十一日

八月一日

同 五日

八月二十六日

九月二日

九月七—二十七日

同 一—十日

同 十八日

同 三十日

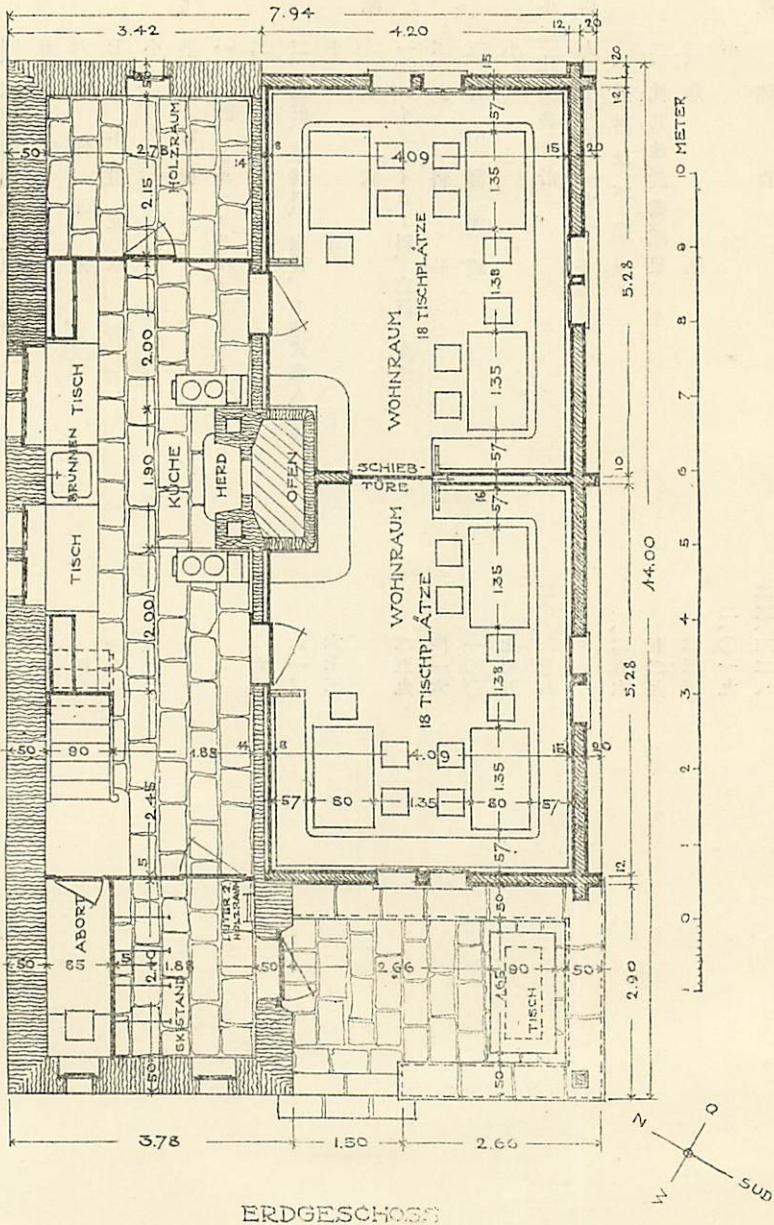
十月七日

三、小屋宿泊簿(夏冬)及びスタンプ	三〇
四、銀鐵製蠟燭立、灰皿(寄附)	
五、婦人室カーテン(寄附)	
六、設備運搬	四二
七、寢床用乾草	一五〇
小計	一、九九二
建築監督費	
一、設計 クルツク及びブイスター	六〇
二、設計 圖水彩畫	六一三
三、寫眞、筆耕料、旅費、上棟式職人祝儀	六七三
小計	二五九
獻堂式	
一、タイプライター料、寫眞、謝禮	四一六
二、食料品	一〇〇
三、合唱隊謝禮	七七五
小計	二〇、三〇八
小屋建築費合計	
尙一九一七年より一九二〇年迄の支出	
一、道路及び標識	一、二五六
二、枕其他設備補足	五二九
三、修繕	二三三
小計	二、〇一九
總經費	二二、三二八

(未完)

SKIHAUS DER S.UTO

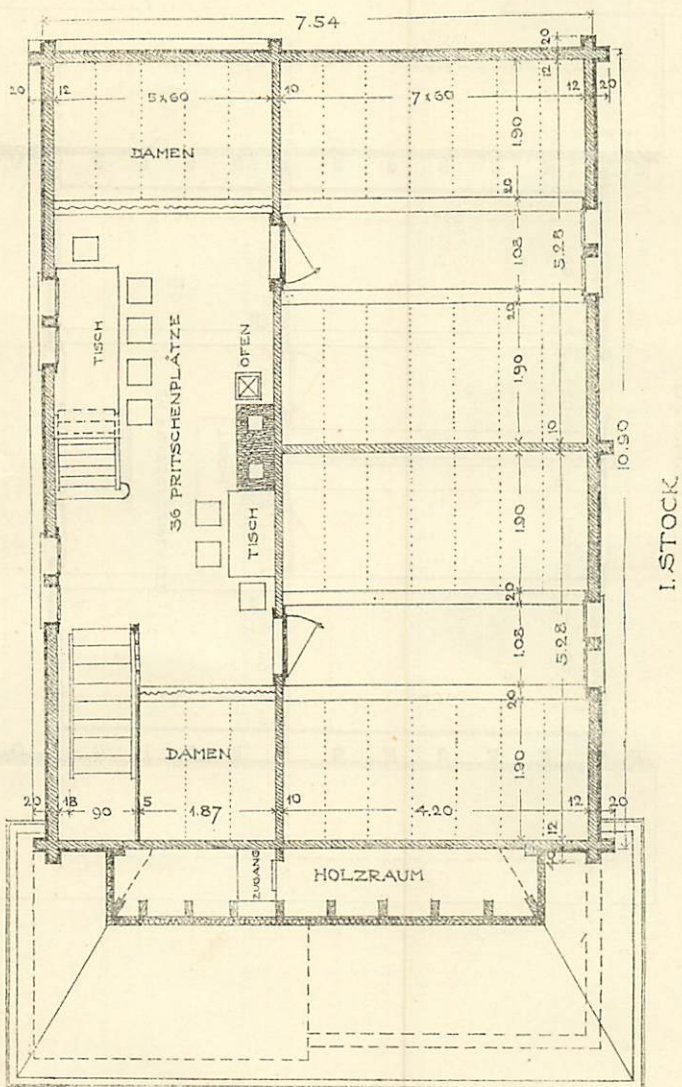
PROJEKT GUSTAV KRUCK JANUAR 1922



ERDGESCHOSS

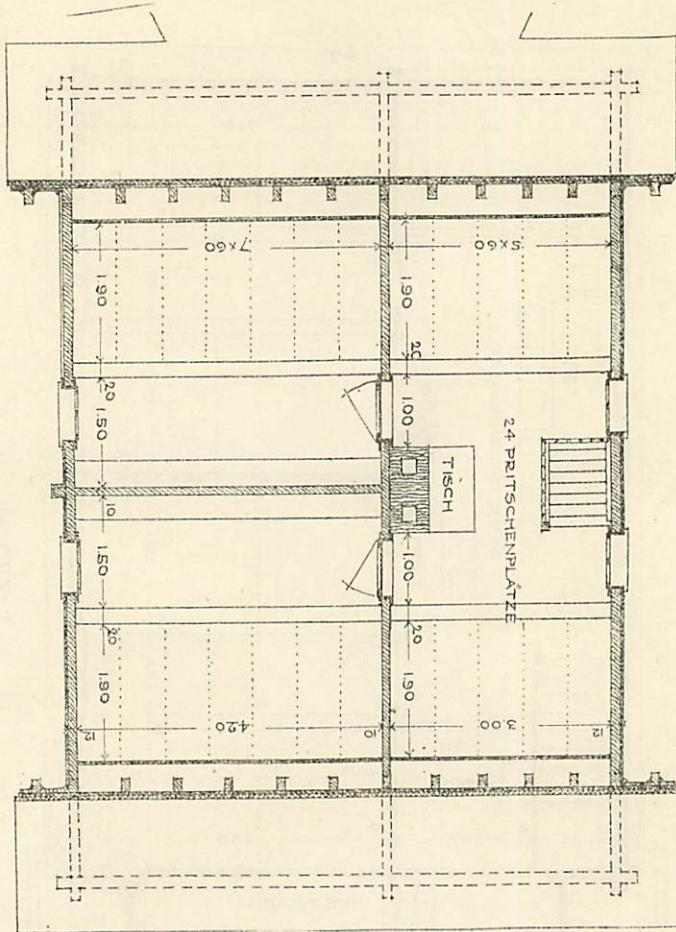
44 TISCHPLÄTZE UND 60 PRITSCHENPLÄTZE

42 PRITSCHENPLÄTZE IN VIER RÄUMEN.
18 OFFENE PRITSCHENPLÄTZE.



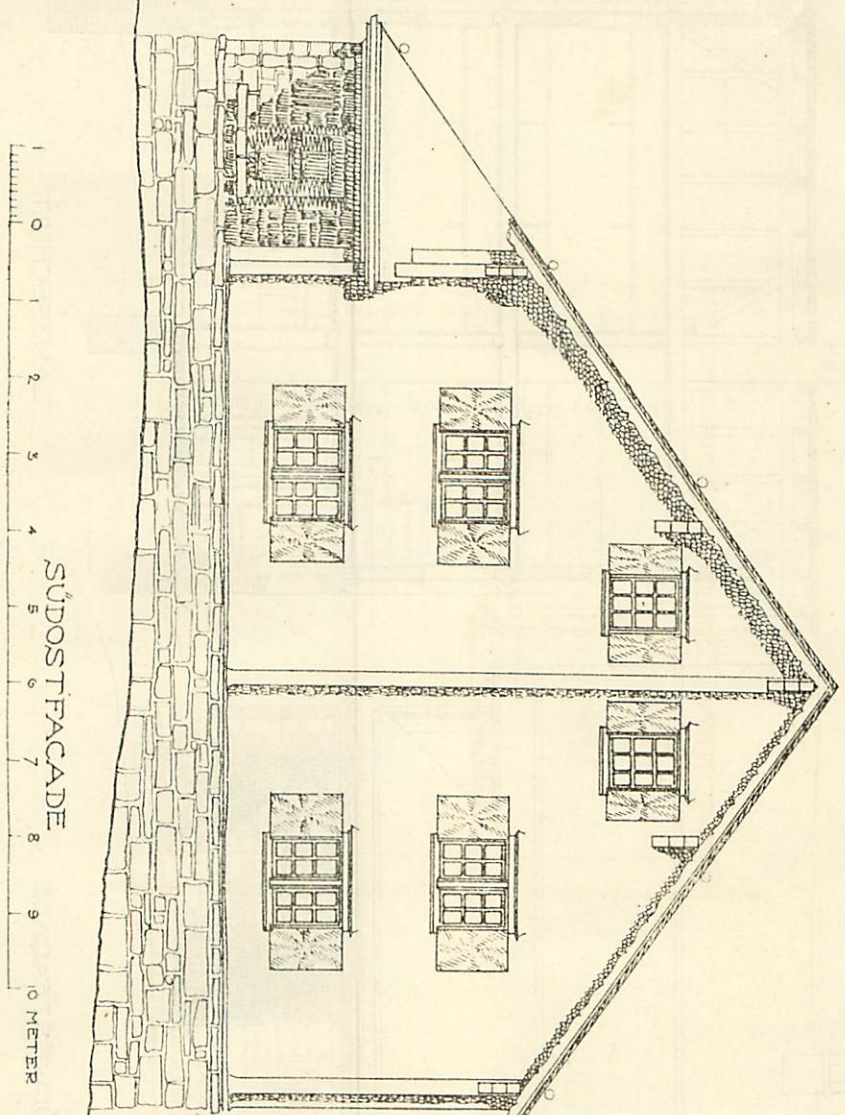
I. STOCK

DACHSTOCK

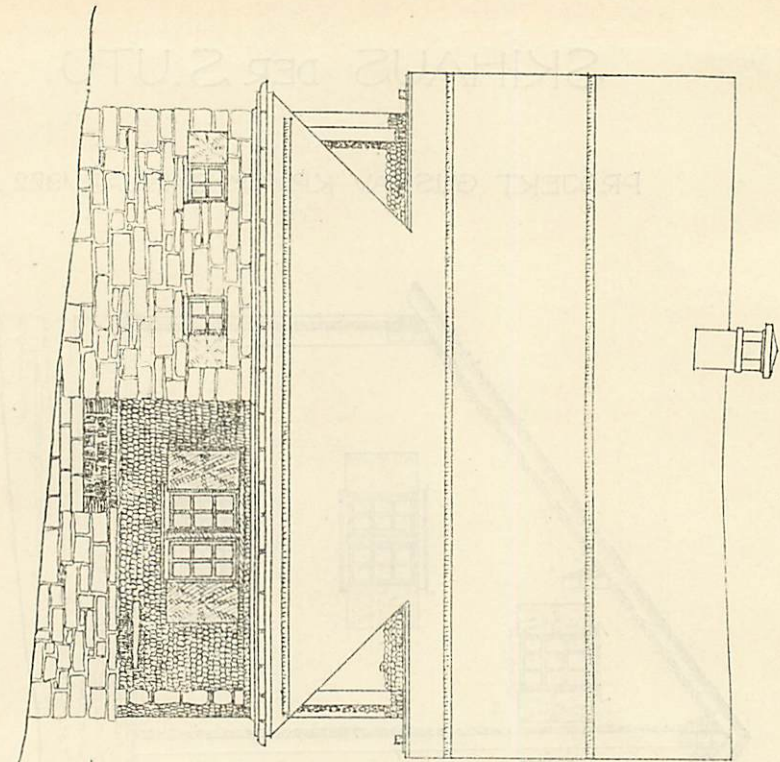


SKIHAUS DER S. UTO.

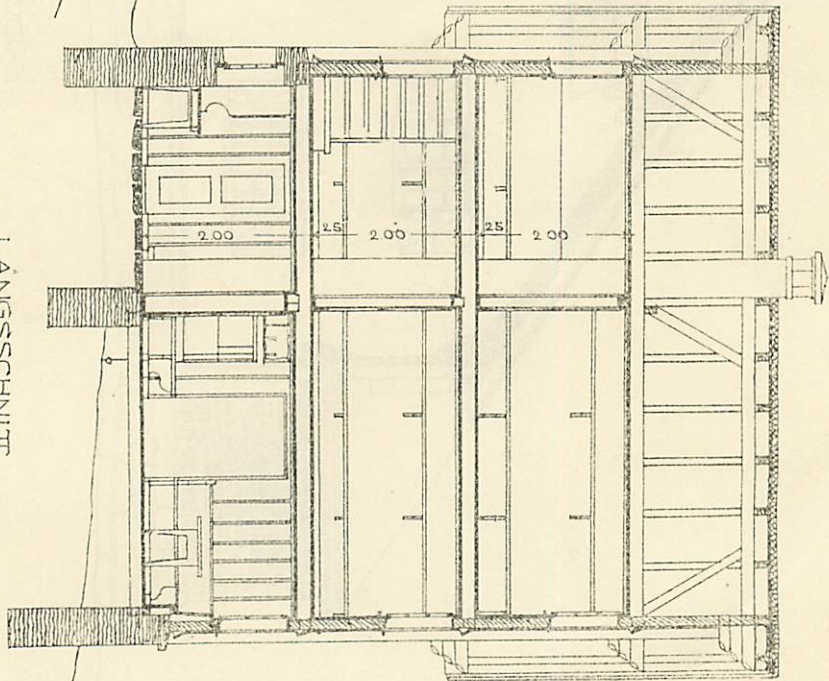
PROJEKT GUSTAV KRUCK · JANUAR 1922.

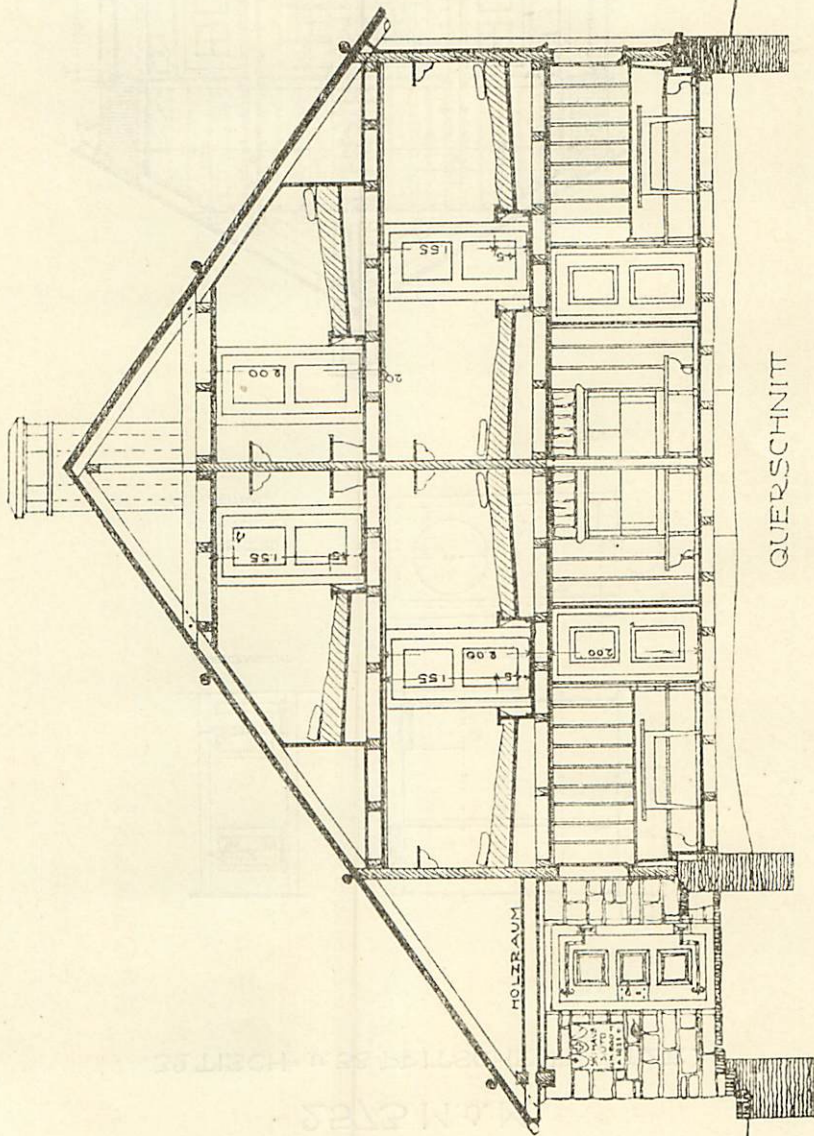


SÜDWESTFACADE



LANGSSCHNITT





QUERSCHNITT

QUERSCHNITT

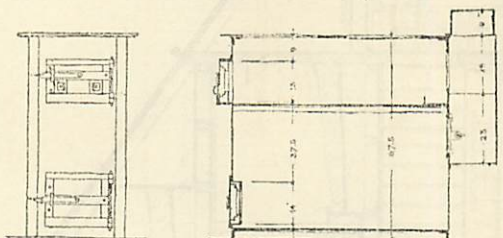
CADLIMOHÜTTE

AUF BOCCA DI CADLIMO · TESSIN

SEKTION UTO · S · A · C ·

2573 M. ü. M.

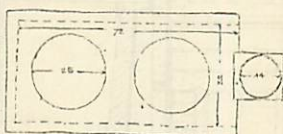
32 TISCH- u. 38 PRITSCHENPLÄTZE.



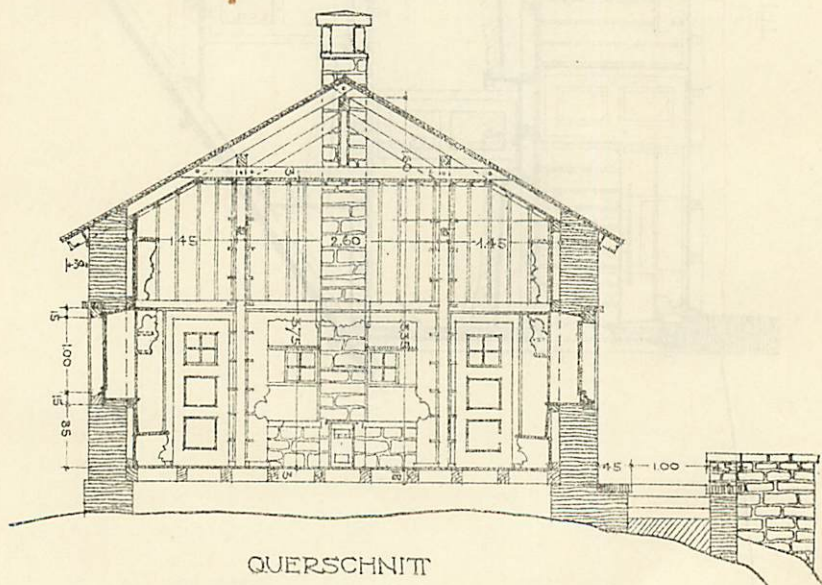
VORDERANSICHT

LÄNGSSCHNITT

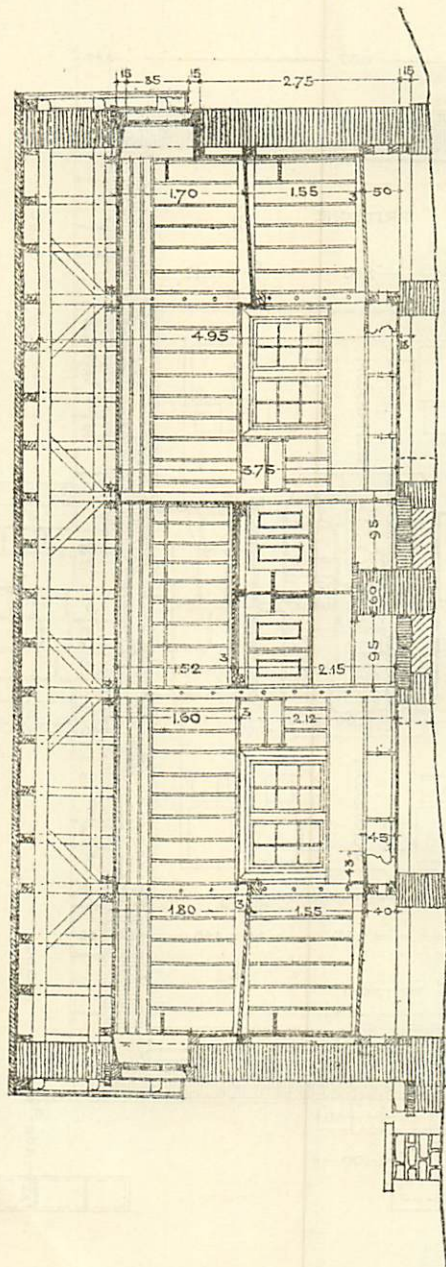
KOCHHERD
GEBR. VÖGELI
LINTHAL



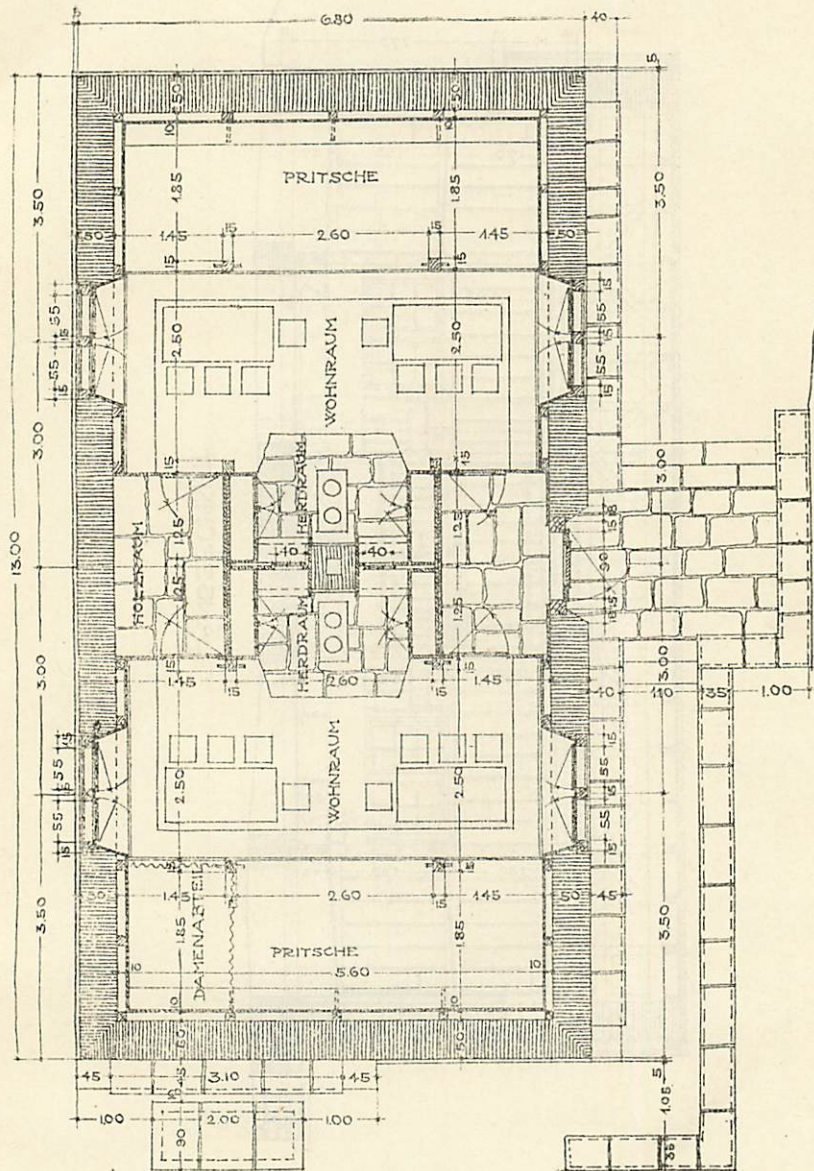
DRAUSSICHT



QUERSCHNITT

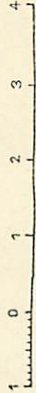


LÄNGSSCHNITT

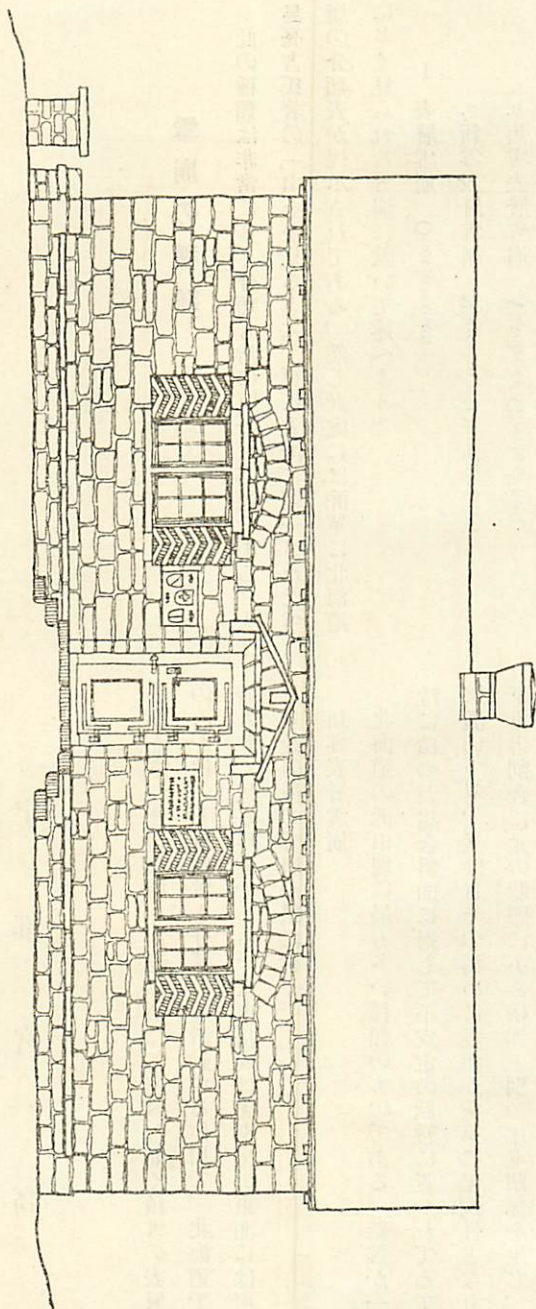


ERDGESCHOSS.

4 METER



SÜDFASSADE DER CADLIMOHÜTTE



北海道に於ける普通の雪崩に就て

(二)

宇 都 宮 高

雪崩の種類

此の種類は非常に多く分類も常に厄介な問題である。大島亮吉氏著の「山」を見ると六〇頁に立派に統一された雪崩の分類表が提示されてある、然し此處には簡單に北海道に多く見られる雪崩に就いて述べよう。

I 表層雪崩 Oberlawinen

a. 新雪表層雪崩 Neuschnee-Oberlawinen

b. 舊雪表層雪崩 Altschnee-Oberlawinen

c. 板状雪崩 Schneebretter (slab-avalanche)

II 底雪崩 Grundlawinen

表層雪崩は北海道ではウツスベリと稱してゐる。簡單に

云ふとさつきの日射と氣温の所にて述べた如く積雪の表層のみが他の下層積雪と分離して滑動する作用で、北海道で最も多く見る現象である。余市岳或は蘆別岳の東面には可なり此の種の雪崩が眼に付く。

新雪表層雪崩

北海道の低山地に最も多い種類のものである。新雪が一時に積つた場合斜面に對して不安定の状態に置かれてゐて氣温の上昇、又は日光の爲めに表面が次第に濕潤性となり下方の割合に元の状態にある積雪と別の比重關係を生じ、表面は可なり重くなり、摩擦より強い状態に呈せられ斜面で支へられなくなり終に斜面に沿ふて表層滑動し初める。

此の状態は多くの人が見る所にして、木の枝又は其の他よ

り落ちた小雪塊の爲めに、或は全然それらの刺戟なしで起るが糸の如き雪崩を見る、これが益々濕性となると表層全部が滑動し初める。次に又他の條件として起るものがある。

それは斜面が融解後凍結したため表層硬雪と成り、その場合にその上に新雪が降つた時は此の表面硬雪の面は非常に摩擦が少いたため新雪の重量又は他の微弱な原因に依りても直に雪崩が起る。此の新雪が少くて極く薄い場合は危険は少いが可なり積雪を見る場合には餘程の注意が必要である

舊雪表層雪崩

此れは普通春季に起る物で北海道春季積雪期間の長い所では注意を要する。

此れは表面が日光又は氣温の爲めに融解し、更に低温度で凍結し此の作用を何度も繰り返す中にザラメ状の雪となり更にその上に新雪を見て、此れが相當の期間の中に前述の様な化學的變化を引き起し同じくザラメとなり下部の方は粉雪のまゝである物が春期になつた時には數段の層を形成してゐる。此れが氣温の増加と共に次第に中間の粉雪は上部の濕潤性と壓力との爲め非常に硬化し兩方のザラメ間に挟まつてゐる。此れが春の暖かきために徐々に表層より

融解しザラメの各分子は温性甚しくなり次第にそれが下方に及ぶ、此の時中間のザラメを界としてこの種の雪崩は起る。然し此の雪崩は出る場所は次に述べる底雪崩と同じく殆んど年々同一の場所に出現するもので、例へば錢函峠の春先きには底雪崩と共に此の種のもが見られる。

板状雪崩

此れは風の所にて述べた如く殆んど風陰側 (Lee side) に起るもので大なる山脈の主稜又は單なる支稜(或は尾根)に於ても同様行はれる現象である。これは乾燥せる粉雪が強い風に吹かれて山稜を横りて、風陰側(必ず雪庇 *Wind-schatten* を生ずる)に堆積する。然るに此の雪質は其處の前よりの積雪と全然性質を異にし、それが爲めにその吹かれて出來た積雪との間には中間層を以て界されてゐる。且つ新積雪層は一般の板状様に風陰側の斜面に沿ふて層を形成する。此れが爲めにその斜面の下方をスキーにて横斷したり或は此の上層の重みを支へる地點が凹状をなしてゐて、日光直射でも及んだときには直ちに板状の層は崩れを生ずるのである。北海道で經驗された雪崩は殆んど此れが多いらしい。非常に吹雪又は強風の時は知らず知らずに風の陰

を選び、不意にこの崩れに出會するのを見る。此れに就いては例を擧げて終りに示す積りだ。

底雪崩 (Grundlawinen)

この雪崩は春の融雪期に多い。積雪全体が斜面上を滑るに依つて起る物である。故に此れは斜面と積雪間との摩擦如何に依る物であつて斜面の傾斜度合、斜面の地質學的性質、ことに植物の繁茂状態及び水の作用如何に依るものにして、又積雪自身の重要如何にも左右されるものなり。

此の雪崩のあつた所はその土地を完全に裸肌と化し、草木類を下方にことごとく運び堆積する。此の雪崩の性質は家の屋根の積雪の滑り落ると、全く同性質を有するものである。北海道の山の多くはブッシュ多くて、その積雪滑動に對する抵抗力強大で、此の雪崩に遭難した例を餘り聞かない。然し草原地又は岩石地の斜面では餘程の注意が必要である。

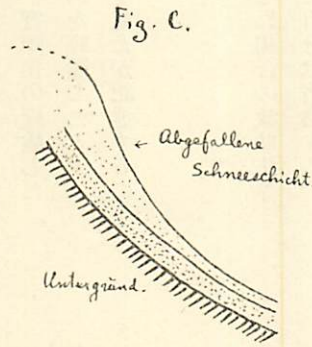
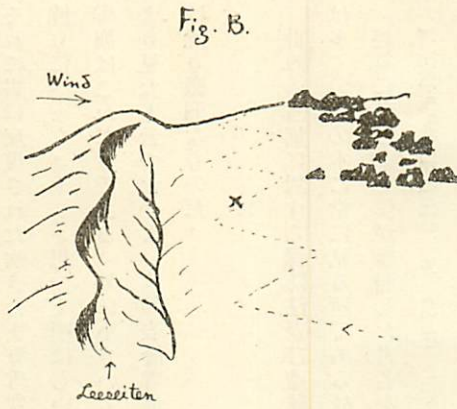
雪崩の經驗に就いて

こゝでは自分の實際見た又經驗したことについて書くのであつて、多くのアルプスの例を引くよりも實際出會した

ことについて書いた方が結局得ることが多いと思つて次の様な微細な經驗を述る。

此れは去年の暮スキー部合宿の折、僕の班が岩雄岳に登つた際に經驗した板状雪崩で、大したこともなかつたが、都合十二人の中九人まで埋つて、その埋つた人が何のこともなくすぐに自力で起き上つた運のよい事件である。此の日は朝から降つてはるたがそう大した吹雪でもなかつた。然し岩雄岳の麓附近に來た時は可なり吹雪を呈し温度も下つて少し歩くには苦痛はあつた。此の山を登るには普通南側に走る緩斜面を登るのが常であるが此の時は井之上温泉と小川温泉とを通ずる夏道に沿ふた關係と吹雪との爲めにちやうど岩雄岳の南東に走る小さい皺を左に取つて登つたのである。時間から云ふと午後一時二十分頃で、日中で一番暖かい時だつた。此の皺の左千米の所に小さい瘤がある。此の瘤とその續く尾根の爲めに、西南風の吹雪は瘤の所で雪庇を構成するに最適の地の利を占め、前述の風陰側と板状雪崩を起因する最大好條件を具備せる状態にあつた。(Fig. 8) 又吾々がジツクザツクするその皺の右手の上には一つの岩の集りがあつて、吹き飛ばされた雪はその岩にぶ

つかりて岩の下方即ち吾々のジツクザツク登行の地を充分万遍なく積雪させる状態にあつた。僕の考へとしては積下の所は危険があるかも知れないが此の岩の下は充分大丈夫と思つて断然登行した、且つ又馬鹿に吹雪くものだから少



しでも風の少い所を選んだ理由である。今登る斜面の縦断面は圖(Fig. C.)だが上半部は二十五度乃至二十八度、下半部は二十度位の傾斜である。今考へると此の場所の状態は A. Lunn 氏の説く Windstah の最適の場面だつたらうと思

ふ馬鹿に失敗したものだ。ちようど先の三人が殆んど登りきつた時に起つた雪崩で、板状の厚さは上部の方が一尺餘下方が二三寸位なものだつた、これは全然板状雪崩で述べた如く吹き積んだ雪質と下層積雪との性質異なつたもので且つ下層積雪表面の摩擦は少い硬雪の状態にあつた、即ち Tabavalanche の完全な状態を呈してゐたのである、此の時一番影響を大にしたのはさつきの岩の集りである、これがな

かつたらこんなことではなくて済んだものと思ふ。只雪庇の下方斜面にのみ積雪は止つてその廣く影響はせないものと解する。此の雪崩にあつた状態を見るに埋つた九人は殆んど一個所に集合し、その範例状態は緩斜面になる所に水平線上に一列になつたことで、九人の中二人が頭を下に倒されてゐた。而して此の二人は何れもキツクターシの最中か、或はその状態にうつらんとしたものでらしい。残りは斜面に沿ふてスキーと共に流され、頭上の雪のため埋つたのである。此の雪崩の速度は非常なものであつて、何の餘裕も無かつた。瞬間と云ふ

より外にない。此の起つたのは板状雪崩の状態にあり、その自重とシユブールに依り截断せられた新雪層の俄然崩落に原因するものであつて、自分の不注意に外ならない。雪質状態はさつきの様にレーザイテンの特有な性質を有し、それに岩に反復された吹きたまり雪質にあつて今考へると餘りにへまなコースと思つて嘆はしい。實際僕の経験した雪崩はこれだけである。外に小さいものを経験したと云ふより見たと云つたがよい位の表層雪崩を見たが記述するには餘り微弱なものだ。

×

此れら雪崩に對する豫防法及び遭難した場合の救助法等は多くの他の本に常に見る所である故に自分は省略する。

終りに參考まで僕が参照した書名を示すと、

1. Skichronik 1913, S. 45-49. über Skilaufen am Seil und Lawinen
 2. Rutgers; Die Lawinengefahr für Touristen. S. A. C.
 3. A. Lunn; Alpine skiing 1921, P. 48-52.
 4. Zsigmondy-Paulcke; Die Gefahren der Alpen S. 80-154
- 一、山 研究と隨想 大島亮吉

二、雨

岡田武松

(二五九一、三、一四)





芽室岳

坂本直行



芽室岳

坂本直行

メ ム ロ 岳

昭和六年二月十一日、日高山脈北端芽室岳（一七五三・七米）に登るの記

坂 本 直 行

私のゐる農場からは、日高山脈が實によく見える。それは北方の芽室岳から、南方の樂古岳迄の間に起伏する十勝ボロジリ、札内岳、美しいカールを抱くエサオマントツタベツ岳、カムイエクウチカウシ、ピリカヌブリ、日高十勝岳、その他無名の立派な山々が百八十度に展開された壯大極まるものなのだ。

昭和六年二月十日

この日は朝から晴天で、農場からはメムロの山頂が、小さくはあるが、ハッキリと見えてゐた。仕事をしながら眺めてゐるうちにたまらなく登りたくなつてしまつて、準備をととのへる。友のNとは前から一緒に登らうと約束して

ゐたのだつたが生憎の病氣で一緒に行けなくなつてしまつたのは淋しいことだ。連日の晴天で多分雪は浅い事と豫想されたから後は天候次第で登り得る事を確信して、獨りで出かけることにする。ちやうど折よく知人のりさんが來てゐたので乗馬で歸るを幸ひロープをつけて引張つてもらふ事にした。二里ばかりの道を強風の後でするぶん凸凹した雪道ではあつたけれど三十分足らずで痛快に飛んで大樹村驛に着く。帯廣で乗換、此處で三分の食料を用意した。其他防寒具で一日の登山としては相當の重さに成つたので途中でへこたれなければよいがと心配になつた。御影驛（舊名佐念頭）に下車したのは夜の十一時半。寒い一晚を驛

で明かず覺悟はしてゐたけれども、驛長さんの御親切で事務室のストーヴの側で暖かく過す事が出来たのは本當に嬉しかった。驛長さんに今迄メムロ岳にスキーで登りに来た人がゐるかどうかをたづねてみると、昭和三年の、やはり今度と同じく紀元節に、札幌鐵道局運轉課の楡金氏外三名の方が登山せられた由であつた。氏等はメムロ川奥の農家に泊つて登られたそうである、けれども日歸りでも充分に登る事が出来よう。

二月十一日

午前三時半朝食を攝つて出發する。ずるぶん、しばれる夜だ。空は一面の星で、上弦の月が淡く照つてゐた。線路に沿ふて行き、それから十二號線の路に出て歩みつゞける。嚴冬の夜明け、それは鼻毛に氷がぶらさがる程の寒さだ、餘り急ぐ事もないので呑氣に歩る。十勝平原の冬の名物は寒さと風だそうだが、こんなひどい名物には全く愛想がつかぬ。

正面に黒く劍山ケンサンとキユサン岳が見える。メムロ川の橋を渡り直ぐ右折して大体道に沿ふて行つた。そのあたりはひどいクラストでおまけに畑の土と混つて一見雪の感じは少

しもない。まるで石の上でもあるいてゐる様である。所々に畑が黒く露出さへしてゐてやがて、つひにスキーをぬぐ可く餘儀なくされる。その爲にこんな平地で豫想外の時間を要し、又疲勞を早めて一日中つらい思ひをしなければならぬのであつた。

まだ、遠く平原には、帯廣の電燈がちら／＼見える。四六七米のわきを過ぎる頃、やうやく夜はほの／＼と明け初めた。嘗て私はこの「平原の黎明」ほどのすばらしさを味つた事は少い。確かに私の山の思ひ出の内では特筆するべきものであつた。限りもなく擴がり擴がる十勝の大平原を、大きく自由に、流れるにまかせてうねる白く凍結した十勝川や、スブカウシ、ウベベサンケ、ニベソツの連山が朝日に彩られて雲海をたらなりてそびえる壯觀に、私は寒さも何も忘れてしばし佇んだ。この黎明の美しさを、悠大さを、出来るだけ多く胸に止めて置かふと、スケッチもした。しかし駄目だ。やはりジツと眺めてゐるのが一番にいい。午前六時十五分、積菓の蔭に寒風をさけて足踏みしながら熱いボスタムとバンで元氣をつけた。

積雪不足の爲澤に出る迄は非常に歩きにくかつた。時々

ボコン／＼と笹の中に雪が落込む爲、エネルギーの空費は
えらいものだつた。

その頃から澤頭の方には雪が降り初めてあたりも時々雪
がち／＼し始めた。メモロの頂もそこからは見られなかつた。
登頂の望みもうすらいだけれども、行ける處迄行かうと歩みをつゞける。最後の農家を過ぎて三十分程でメモ
ロ川べりに下りた。澤の中は廣くて歩き易い。そこには嘗
つて造林がは入つたらしい。その時の道とおほしい所を辿
つて行く。澤に入つてから三番目の合流點、即ち左側から
の第二番目の支流の合流點、標高七〇〇米の地點で休憩し
て食物を攝つた。一五七六米の東部の尾根はタンネンで覆
はれた、急傾斜の實によいスロープを持つてゐる。時間が
あれば滑つてあそびたい處だ。

この地點からはメモロ岳の頂をみる事が出来る。薄雲の
中に逆光線に黒くみえるその山頂から盛んに吹揚げる雪煙
をみるのはちやうどスリ硝子を透してみる様な氣持だ。距
離が比較的短いから千米の差は相當に仰角をもたらず。私
はこゝから頂のスケッチをした。そして地圖の不正確なこ
とを知つた。コースは唯一つしか考へられない。頂上は二

つの瘤からなつてゐて、そしてこの二つの瘤は北下してゐ
るひとつづゝの尾根を持つてゐるが、地圖には一つしか記
入されてゐない。左の尾根は右のそれよりもずつと小さく
傾斜も急である。登路としては右の尾根のみである。

午前九時半、この合流點から左折して、頂上から發して
ゐる支流を溯行する。初めは川の左岸の臺地へ上がりそれ
から澤へ下つた。積雪少い澤歩きは油斷がならない。一度
テールを水につけてしまつて、雪が丸太の様に凍りついて
弱つてしまつた。万一を思つて着換を持參してゐたものゝ
心配だつた。三〇分も歩ると頂上の右の隆起から出てゐ
る尾根にぶつゝかる。澤はこの尾根を抱いて二分する。こ
ゝでアザラシを着けた。これ迄の傾斜はシユタイグワツク
スが非常によくきいて樂であつた。この尾根は實に美しい
タンネンで覆はれてゐる。この尾根を右山に左山にまいて
アザラシの最大能率をあげてひたのほりにのほつた。然し
重い荷は遠慮もなくスピードをチエツクする。一三〇〇米
附近にはタンネンの間にシャクナゲが、點々と頭をもたけ
てゐる。この邊りから新雪で覆はれてゐるのでラツセルに
苦しんだ。然し幾度か雪煙の立のほる頂を仰いで自らを

はけました。一四〇〇米附近でタンネンはやうやく姿を消してダケカンバの疎林が鞍部まで續いてゐる。札幌附近の山岳や中央高地の山岳と比較して、日高山脈の森林帯の高さは大体四五百米の差がある。

雪は最早スキー使用をゆるさぬ状態になつたので、スキーをぬぎ、アイゼンにはき換へた。そしてスキーは風が強いののでダケカンバの幹にしぼりつける。アイゼンはぶきみな音をたて、硬雪に喰込む。シードポーからの登りは途中の森林帯の傾斜よりむしろ緩かである。樂に頂上の北の鞍部に達した。こゝから頂上迄約百米位である。東部の瘤は岩石が一面に露出してゐる。強風が雪の止る事をゆるさぬ爲だ。最後の登りも終へんとして、目前の頂を仰いで、今日の行を約し乍ら病の爲、家にある友を想ひ出して淋しく感じた。そして頂は他日又友と共に踏む日もあると考へると私の心はどうしてもその三角點を私一人で踏む事をゆるさないほどであつた。

時は一時半。眺望は皆無。薄いらしいその雲の上の眩しい程の日光を想像すると、もどかしくて仕方がない。けれども登頂のよろこびはやはりよろこびだつた。私は雙手を舉

げてエコーを叫んだ。其の聲は忽ち雪煙と雲の中に消えて行く。時計の硝子は眞白く凍結して字がみえない程だつた。寒氣と時間は頂に名残りを惜しむ暇を與へない。直ちに踵を返して足早にかけ下りた。と見よ、忽ち雲が破れて紺碧の空がぐんぐんと擴大してゆく。それは本當に瞬間であつた。私はうれしくなつて再び鞍部迄かけもどつた。カメラだ、スケッチだ、然し猛烈な寒氣はそれをゆるさない。手袋をとると手は忽ち白く凍傷して行くのだ。それでスケッチは斷念してカメラだけで我慢した、それも一度ジャケットを押しは手を暖めなければならぬ程だ。頂上の西方の約一七四〇米の尖端から盛んに雪煙が眞しぐらに碧空高く舞ひあがつてゐるのは壯觀だつた。時間の餘裕があつたらこれにも登らうと思つて來たのだが駄目だつた。其處からは西に夕張、アシユベツの連山が望まれた。北には下ホロカメツトクの尖頂が眼立つて見え、その陰に十勝の山塊、それに續いて雲の間に眞白な沼の原の高原が見え出し、盟主石狩岳は雲中に山腹を現はし始める。續いてニベツツの絶壁とウベ、サンケの秀麗。十勝の平原と十勝川、それは更にその壯大を増すものであつた。然し最も期待してゐる日

高北部の大観は全々絶望に終つたのは如何にも残念だつた。一時半シーデボー目差して下つて行く。再びスキーにはき換へ下りを急ぐ。スピードを出したのであるが、重いルツクサツクと足の疲勞はそれを許さない。とは云へ下りはやはり早い、本流との合流點に出たのは二時だつた。そこでルツクを擴げて、初めて落ついた氣持で山頂を仰ぎながら食事をとる事が出来た。それは既に懐しさを以て眺め得る姿だつた。そして登りしなに此處から頂を仰いだ時、焦燥に驅られて眺めた氣持を思ひくらべて見た。其れは實に愉しい心持であつた。うん愉快だ」と獨言をもらしなから荷をまとめて、澤を下つて行つた。スキーのワツクスを塗り直して。

澤から右岸の臺地上る間は十四間の急斜面であるが、積雪の不足とブツシユがある爲め遂にスキーをぬいでしまつた。雪は腰を没して随分時間を費した。そして最奥の農家へ出たのは四時だつた。それからは又午前と同じクラストに惱まされつゝも急いで下つて行く。ふりかへる空には黒くメムロの連山が擴つてゐる。ニベツツやウベ、サンケの山頂は赤く夕日に映えて、平原にはチラホラ帯廣の燈火が

みえ初めた。普通ならばこの位の傾斜でもどん／＼滑るのであるがと思ふとスキーを擔いで歩くのが如何にもばからしく思はれてならなかつた。十二號線のメムロ川の橋に出たのは五時半。うっかりすると七時十六分の最終列車に乗りおくれるので、此處で一休した後は暗い一直線の道を三段滑走で急いだ。そして驛に着いたのは六時半であつた。驛長さんは私の歸つたのをみて、「一人だつたので心配しました」と私の成功をよろこんで下さつた。随分とあわただしいものではあつたが私にとつては實に、愉快な、忘れ難い一日であつた。

(一九三一・二・一四)

備考

一、参照地圖「佐念頃（陸湖五万分の一）」

二、平地が若し普通の積雪状態で、そしてパーティで行くならば私が要した時間よりも確かに三時間は短縮出来る事と思ふ。それにしても日高の連山は積雪の最も豊富な三月がスキー登山の最良のコンディションを與へてくれるものと思ふ。

第九回全北海道選手権大會の記録

宮 下 利 三

一月廿四日廿五日の兩日に亘つて、全日本選手権大會の札幌地方豫選と一緒に、第九回全北海道選手権大會が札幌郊外荒井山附近で行はれた。

第一日は午前九時半

午後一時

五〇キロ競走

十八キロ競走(複合を含む)

第二日は午前九時半

午後一時

ジャムプ競技迄複合競技のジャムプ

三二キロリレー。

と云ふ順序で競技が進められた。

試みに試合當日の氣温を窺へば次の如くである

二十四日(土)

午前六時

攝氏

(-) 四 度

午前八時

(-) 四 度

午前十時

(-) 三・六 度

午後零時

(-) 三・一 度

午後二時

(-) 三 度

二十五日(日)

午後四時

攝氏

(-) 四・六 度

午後六時

(-) 四・六 度

午前六時

(-) 七・二 度

午前八時

(-) 五・四 度

午前十時

(-) 二・八 度

午後零時

(-) 二・八 度

午後二時

(-) 三・八 度

午後四時

(-) 四・五 度

午後六時

(-) 五 度

◇五十キロレース

此の競技は、二つの意味で非常な興味を豫め湧かしてゐた。一つは、久し振りで栗谷川君が「ダウエルラウフ」をやると云ふ事、並に彼に對する六平、箕輪兩君の實力が何



全日本選手権大會に於ける
關口勇選手の飛躍

の位置に彼を脅すかと云ふ事であり、他は、其の新らしく發表されたコースが、とにも角にも實際に五十キロの距離を有してゐると云ふ事である。

前者の點については、戦蹟が結局、その豫想を適中させて面白いし、又後者の點に就いては、今迄嘗て、味はざる「ダウエルラウフ」の真髓に觸れ得て、多少とも斯技の見通しも利かすことが出来て愉快であつた。

丁度、スタートを切らうとした時分には、空が怪しげに曇り、遠く手稻から送られて來た烈風が、競技場の附近を吹きまくつて一寸凄愴の感を與へてゐた。

今迄吾々は、ずる分、「ダウエルラウフ」のスタートを見ただけでも、その多くは、「ラング・ラウフ」と餘り變らなないテムボで選手が飛び出して行くのを常としてゐた事を記憶してゐる。今度は、勿論スタートを切つて直ぐ軽いダラ／＼登りになつてゐる關係もあるけれども、出て行く選手が皆一様に、云ひ合はした様にのそ／＼してゐる。「俺は之から十二里の道を走らんだ！自重しろ！」——そう云ふ強い決心が語らざる面々にも讀み取ることが出来た。

五十キロの出發は、三十秒置きに決り、二十四名の選手

が九時五十一分迄に出發を終へた。(但し申込は三十三名であり従つてスタート前に九名の棄權者があつた)。

出發後三キロ位の處で標識の旗が風に吹き飛ばされたために、前走者は一時走路に迷つたと云ふ遺憾事が、周到に用意された全コース中に一ヶ所あつた丈で、(約五、六十米位の間)他は何等の不安なく走る事が出来た。

私は四十キロの地點で棄權はしたけれども、此の競技には、競技者として参加したため、途中の事に就いては、比較的詳細を知る事が出来た。

競技中特に異様であり、意外であつたのは、丁度十五キロの地點に設けられた休息所の模様である。其處は藤舞市街を横切る地點なので、街の人々が多數集つて、コースの兩側にテーブルや椅子を並べて、粥の温いのや、牛乳等を豊富に用意してあつた。只夫丈けならば別に偉觀でもないが、之のステーションに休んで、悠々とワックスを塗つたり、牛乳を啜つたりしてゐる選手が全く山をなして群がつてゐて、其の各々が皆背中から湯氣を立て、汗ばんだ瞳をギラ／＼させてゐるに到つては、全く壯觀そのものであつた。

然し此の様な第一のステーションの混雜も、第二のステーションである石切山に於ては見る事が出来なかつた。即最初の十五キロ位は前走者が比較的スピードをセーブしたに反して、後走者は追ひ付くに任せて頑張つたため後半に到つて、漸次スピードを減じて來た。此のレースで最も白熱的接戦を演じたのは何と云つても、六平、箕輪、栗谷川の三君である。

スタート番號は栗谷川九番、箕輪十四番、六平十七番である。最初の四キロに於て箕輪は既に栗谷川を抜いてしまつた。處が、この後數分ならずして、六平は又箕輪を抜いた。此の形勢は第一のステーション迄持ち續けられた。處が第二のステーションへ向ふ途中で箕輪は栗谷川に先を讓つて、その跡について行つた。之の間六平君は全力を擧げて、幕進して行き、その跡を二人の執拗な目が鋭く追つかけて行つた。若し六平君が小樽豫選の際に受けた足傷が無かつたならば、最後の八キロ間に於ける頑張りも當然期待されたに相違ない、けれども終に、三十キロ近くも強い選手の手先頭で走り通した疲労と又豫期されてゐた足痛のために、藻岩の見え出した豊平川附近でレースを（少くも優勝

を放棄した。その時二番目にあつた栗谷川君は巧みに先頭を箕輪選手に讓つて、その跡に付いて來た。栗谷川君の自信では、藻岩の麓からゴール迄の五キロの道で、二分半のハンデイキャツプを取り戻す事は何でもないのであつたとの事である。夫れで彼は豫定通り藻岩の麓で、イキナリ先頭に立つて、突走り出した。見る見る中に兩者の差は開いて行つた、そしてゴールの二キロ前では一分半近くも引放した。けれども亦箕輪の追突も甚だ急であつて、最後の登りで再び栗谷川を五〇秒位の所迄詰め寄せてしまひ、結局北海道の選手權を獲得するに到つた。

此の三人のレーサーが互に盡した處の祕策には、甚だ教訓に富んだものが藏されてゐる。中でもスタート運の最も悪い栗谷川君の選んだ地味な戦法と、最もスタート運に恵れてゐた六平君の思ひ切つた戦法とは、共に夫れが彼等に取つては當然なものであつたとは云へ、非常に良いコメントラストであつたと思惟する。

悪評を好む者は、此の場合の箕輪君を以て、漁夫の利となすかも知れない。けれども小樽豫選や全日本の成績等より見て同君の實力を疑ふ餘地は無いのである。

尚、三十五キロ迄は優勝候補として非常に有望であつた木村(三〇番)、山田(三二番)の兩選手は後半で空腹と疲労のためガタ落ちし、結局覇権を失した。此の二選手も接戦はしたが、一方のコンデイションの良い時には、他方のコンデイションが悪く、前に述べた場合の様に、ほぼ同一のコンデイションを以て終始したのとは大分趣きを異にする。

次にゴールに入つた選手の成績を示そう。

一着	箕輪 正治(製鐵)(十四番)	タイム	五時一八分四〇秒
二着	栗谷川平五郎(明大)(九番)		五時二〇分四四秒
三着	木村 顯三(明大)(三〇番)		五時二六分二四秒
四着	六平 時之助(G B)(十七番)		五時二九分〇六秒
五着	山田 四郎(北大)(三一番)		五時二九分二六秒
六着	小池 高行(G B)(十六番)		五時三四分五九秒
七着	鮎澤 熊一(三菱)(二八番)		五時四一分〇三秒
八着	澁谷 虎造(北商)		五時四一分三二秒
九着	芳賀藤左衛門(無)(四番)		五時四三分四〇秒
十着	村木 慶三(ツェンネ)(二〇番)		五時五〇分四三秒
十一着	上 島 信(札中)(五番)		五時五七分一三秒
十二着	小畑 忠一(高商)(二九番)		五時五九分三〇秒
十三着	星 光 平(三菱)(二七番)		六時〇二分五六秒
十四着	大原 孝(G B)(二二番)		六時〇五分五三秒
十五着	藤澤 佐一(G B)(一番)		六時一分二九秒

十六着	伊藤 正治(北商)(一九番)	タイム	六時二三分三一秒
十七着	遠藤 藏之助(墓)(三三番)		六時二七分一八秒
十八着	八木 孝夫(札工)(二五番)		六時四七分二七秒
十九着	民谷 榮策(三菱)(二一番)		七時〇二分二七秒
二〇着	齋藤 龍三(無)(二一番)		七時三〇分四〇秒
二一着	梅津 寛治(墓)(二四番)		七時五六分三〇秒

◇十八キロ競走

此のラング・ラウフは之迄札幌附近で行はれた大會中で、最も距離の長いものに屬する。従來十四・五軒の距離を以て、十八キロの如く考へてゐた向きもあつた様であるが、かゝる人々は恐らく今度の距離を以て二十キロに近いと早合點したかも知れない。しばらくその曉名を秘めてゐた木間君が成年組で斷然たる力を示し、其れに續いて同じ小樽綠ヶ丘に育つた大浦君が幼年組で優勝してゐる事は特筆に値しよう。例外はあるとしても概して強い選手は、決して孤立の状態で現はれるものではなく、群れをなして現はれるものであると云ふ事は、大會の開かれる度毎に痛感せしめられる事實である。トレーニング、試合當日の準備、ワツクスの研究、そうしたものが勝敗を決する因子として重要な

働きをなす以上、個人的にしか練習し得ない選手のハンディキャップは相當に大きいものと云はねばならない。小樽中學がジャムプに強く、小樽商業學校が競走に強いと云ふ事は、又他にも色々原因があるだらうけれども、上の場合と同じ範疇に屬すべき事柄としか考へられない。

幼年組の盛大さに比べて、成年組に於ける札幌地元選手の不振であつたことは、その地理的ハンディキャップを考慮に入れる時、甚だ寂寥を感じずには居られない。その一因として擧げるべきは、札幌諸中學出身の優秀選手が、町に残らずに上級學校へ進む傾向が強い事と、インターカレッジの關係から北大選手の出場不足とであらう。木間、箕輪、六平等の強い連中が響を並べて控えてゐる小樽軍の實力こそは誠に全道に誇るべきである。

十八キロ壯年組	一着 芳賀恒太郎	二時三二分三〇秒
成年組	一着 木間 四郎 (G B)	一時五三分四七秒
	二着 小野寺 正 (札商)	一時五六分五〇秒
	三着 毛内 章 (北中)	一時五七分五七秒
	四着 森 信一 (G B)	一時五八分三六秒
	五着 安立 正雄 (製鐵)	一時五八分四〇秒
	六着 奥井 由雄 (北大)	一時五八分四三秒

幼年組	一着 大浦 忠二 (G B)	一時五四分二〇秒
	二着 坪川 重光 (北商)	一時五六分四二秒
	三着 佐藤 直一 (札商)	二時〇〇分一〇秒
	四着 安孫子 正二 (札二中)	二時〇二分三五秒
	五着 杉本 次郎 (札商)	二時〇三分一八秒
	六着 山口 正一 (北中)	二時〇四分四二秒
	七着 香曾我部 節 (北中)	二時〇五分二一秒
	八着 志村 誠一 (北中)	二時〇五分五七秒
	九着 中村 重一郎 (炭汽)	一時五九分〇七秒
	十着 福丸 榮治 (同)	二時〇〇分五八秒
	十一着 小野寺 樹 (札鐵)	二時〇一分一三秒
	十二着 棚橋 卓郎 (ツェンネ)	二時〇一分二八秒
	十三着 鹽田 鐵夫 (美唄)	二時〇五分〇五秒

◇ ジャムプ

轉倒者が甚だしく多いと云ふ事が斯競技の數的進歩を疑はせる程である。記念ジャンツエが特にこぶ (Yohim) の短い關係から、フライトが高過ぎ、其のため此の臺に慣れない人は一様に空中で甚だしく萎縮してしまふ。此の事は勢ひジャムプの眞髓である鋭さを減殺させてゐる。尙不幸な事に、着陸斜面はそのアブローチに對應すべく餘りに短

く、且緩い。此の事は又直接にジャムバーからサツツを奪つてゐる。航空力學の教へる様なシャンツエを有する赤城、野澤、豊原等に想到する時、北海道に良い飛臺のない事は、何よりも遺憾と云はねばならない。選手も一様に「フライトの低い、あづましい臺」を望んでゐるのだ。吾々は此の希望を適へてやらなければならぬ事を、此の機に痛感する。此の大會で光つてゐるのは關口と伊黒であらう。新人伊黒が三七・五〇米と三六・〇米で拔群に距離の差を付けた事は特筆に値する。

ジャムプ

成年組	一等 關口 勇(若老會)	一四四・〇點
	二等 奥山 英二(G B)	一一九・四點
	三等 杉村 鳳次郎(北大O B)	一一九・〇點
	四等 出雲崎 清藏(無)	一〇三・四點
	五等 村井 延雄(北大)	七二・〇點
	六等 千葉 實(北中)	七一・〇點
幼年組	一等 伊黒 正次(檜中)	一四〇・四點
	二等 濱 謙二(ツェネ)	一三〇・九點
	三等 岡部 正二(札二中)	一一〇・四點
	四等 影井 哲夫(三井)	一〇九・四點
	五等 小島 謹也(札商)	八八・〇點

六等 渡邊 銅太郎(札二中) 七八・九點
最長不倒 三七米五〇 伊黒 正次(檜中)

◇複合競技

之れには新人毛内章君の方闘が何と云ふても目立つてゐた。中學生の身で良く成年組の覇を握り得た事は、その將來を思はせて愉快である。老将杉村君が依然として上座に立つてゐる事は後進のため誠に良い勵みである。幼年組は出場者も七名であり、ジャムプで二回轉倒したものが多く、入賞者三名を數ふるに過ぎなかつた事は又當然であつたかも知れない。

複合競技

成年組	一等 毛内 章(北中)	二八四・六點
	二等 杉村 鳳次郎(北大O B)	二二〇・二點
	三等 油谷 圭次郎(炭汽)	二一七・五點
	四等 奥井 由雄(北大)	一八五・〇點
	五等 河原 武雄(ツェネ)	一五八・二點
	六等 富田 針雄(蕨)	一四三・六點
幼年組	一等 澤本 長市(G B)	二三二・七點
	二等 濱 謙二(ツェネ)	二三二・〇點
	三等 四ヶ谷 勇(G B)	一八二・〇點

ドリ

最初の一週は、北大、三菱、G・B、札商等殆ど一團をなして進み、興味は均等に各チームに懸けられてゐたが、

第二走者に北大黒田、G・B大浦が出てから形勢は全く此の二チームの上に懸り出した。黒田は神社山の登りに差し掛る以前に大浦に抜かれ、僅小の差でゴールへ身を運んだが、第三走者北大山田は終にG・Bの小池を同じ神社山の登りで抜き返し、最後は、奥井、本間より約五十秒前にスタートして、逃げ込みの策戦を遂行した。然し本間のダッシュは、三キロを出でずして既に奥井を抜き、漸次差を擴け、當日の個人記録を以てゴールに突入した。

三二キロリレー

一着	グリュン・ベルガー	三時〇六分二六秒
1. 森 信	一ラップ	五〇分〇八秒
2. 大 浦 忠 二		四五分〇一妙
3. 小 池 高 行		四七分一一秒
4. 本 間 四 郎		四四分〇六秒——最高記録
二着	北大 A 組	三時〇九分三五秒
1. 中村新一郎		四九分一一秒

2. 黒田 敦	四六分一七秒
3. 山田 四郎	四六分三五秒
4. 奥井 由雄	四七分三二秒

◆空沼小屋使用人員

空沼小屋が 秩父宮殿下の御恩召によりて昭和五年二月十一日より一般のスキー或は登山家に御開放になつて居る事は周知の事でありますが、昭和六年二月十一日に至る滿一ケ年の拜用者は次の如き多数に上つてゐます。

種 別	使用人員	使用延人員
官 公 吏	二七〇人	五六九人
學 生	二一四人	四七〇人
共 他	一六五人	四二五人
計	一八二人	四〇八人
冬 期	四一人	九八人
夏 期	四一人	一一六人
冬 期	四八人	一一〇九二人
夏 期	四七六八	九九四人
冬 期	四四四人	二、〇八六八
合 計	九二〇人	

◆座談會

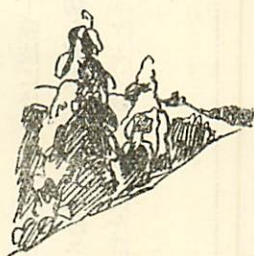
二月十七日午後六時札幌商工會議所會議室に於て、豊原に開催の全日本スキー選手権大會出席の諸氏を招じスキー座談會を催しました。其の記事を本號に掲載する心算で速記の翻譯を急がせましたが、頼んだ速記者が會の翌日から札幌市會が始まり市會專屬速記者としての仕事に追はれて遂に間に合いませんでした。第七號から掲載致します。當夜の出席者は北海道選出の選手其他大會出席の

箕輪正治、秋野武夫、木間四郎、小野寺正、村井延雄、關口勇、長田光男、葛西儀四郎、高橋次郎(小樽高商教授)、南留三郎(札幌商業教諭)、錦戸善三郎(札幌第一中教諭)、高野重一(北海道廳員)、此の外に道廳の宮下利三の諸氏並に本會々員

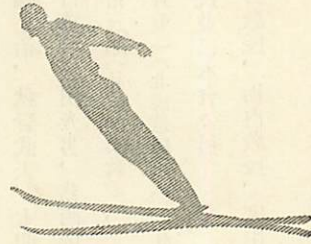
大野教授、枅内教授、廣田戸七郎、高橋昂、長野寛

◆第七號記事豫告

- 一、瑞西山岳會の登山小屋
グスタフ・クルツク著
山崎春雄譯
- 一、茶々岳と阿頼度富士
波邊成三



- 一、千島のアルバムから
佐々保雄
- 一、全日本選手権大會に就て(スキー座談會記事)



ス キー ジ ャ ム ヤ ピ ム ガ ン

廣田戸七郎著

山とスキーの會刊行

本書はスキー競技に於て最も重要なスキージ
ヤムプの一切を解説し、且つ國際スキー競技
會に於けるジヤムプ競技の状況を詳説してあ
ります。

四六判

二百四十一頁
別刷寫眞版 三十二葉
挿入圖版 四十餘圖

定價 金壹圓五拾錢

送料 拾貳錢

御希望の方は振替口座小樽八四九五番札幌市
北二條西三十三丁目一番地「山と雪の會」宛に
御申込と同時に御振込下さい。

◆「スキー」を研究せられる人、登山に興味を持たれる方が一人でも多くお読み下さることを御願ひいたします。

◆「山岳」と「スキー」に關する御寄稿と寫眞の御惠送をお願いします。
原稿紙は御申越次第お送り致します。

◆原稿は、。を一字とし、行を更めるときは一字下けること。

定 價

一 部 金 參 拾 錢
六 部 金 一 圓 八 十 錢
十 二 部 金 參 圓 六 十 錢

*前金御申込か、現金でなければお送りいたしません。

*御送金はなるべく振替にてお願致します。

昭和六年三月一日印刷
昭和六年三月三日發行 (毎月一回一日發行)

編輯者 長 野 寛

印刷兼 發行者 長 野 寛

北海道札幌市北一條西二丁目

印刷所 札幌印刷株式會社

北海道札幌市北二條西十三丁目

發行所 山と雪の會

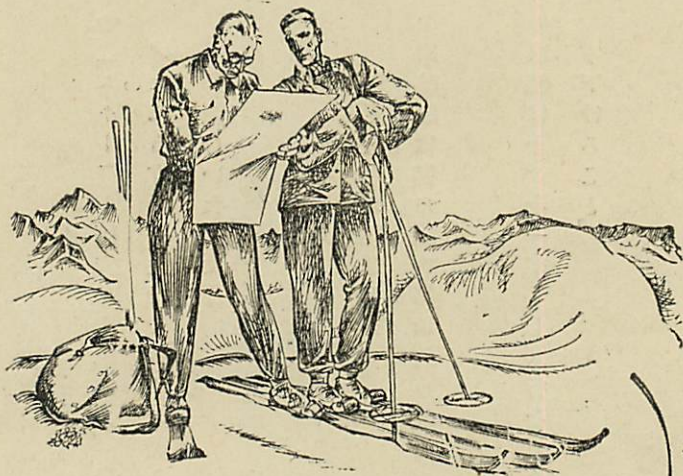
振替口座水樽八四九五番

昭和六年三月一日
印刷納本
發行
(毎月一回一日發行)

山と雪

第六號

定價金三十錢



アールベルグ・スキー及び冬山の道具！
 (純正ヒッコリー材・ロックバーチ材メープル材)
 ビッケル、EDELWEISS印
 (鋼鐵手打製 24.27 $\frac{1}{2}$ ・30.33 $\frac{1}{2}$ cm 保證付)
 ルックザック (スイス製布地、絶對防水)
 スタイガセン (鋼鐵手打製八本瓜其他)
 燃料META及びアルミ炊事具各種
 羽毛製シュラフザック及び冬期露營用具

Arlberg Ski



Hannes Schneider
 (商標登録)

三越・伊東屋・白木・野澤屋

合名會社

美満津商店

東京・本郷・赤門前